F－2　栄養との関連からみた食料費の研究―地方差について―（第2報）

福岡県社会保育短大　○松田紀美子　出石康子

目的　演者らは新しい理論食料費試算法研究の目的で、昨年報告したように新しい栄養価計算法を工夫し、成分別平均単価および試算食料費算出法を案出した。今回はこれによって、昨年の月別食料費の検討につづき、全国を13地方に分けて地方別食料費の検討を行った。

方法　国民栄養基準量を基準とし、成分別に単位量を定め、家計調査年報を用いて摂取した食品の価格と使用量から、成分別に1単位量の平均価格（成分別平均単価）を算出した。これによって国民栄養基準量をみたす食料費（標準食料費）を試算し、実態食料費、栄養摂取の実状などとあわせて、昭和40年から45年までの地方別食料費の特長と概要をとらえた。

結果　1）実態食料費・試算食料費とも全国を100とした指数にはかなりの開きがあり、実態の指数では最高が京浜地方、最低が東北地方で、試算の指数ではそれぞれ京阪神地方と九州地方となった。

2）指数の高かった地方の栄養摂取状態は、京浜地方はすべての成分の摂取において全国平均を上回っていたのに対し、京阪神地方はほゞ全国水準にとゞまっていた。また指数の低かった地方では、東北地方の方が九州地方よりもわずかに良好であった。

このことから、地方別食料費にみられる差には価格の影響の強いことが推測される。

3）時系列にみると、実態食料費、試算食料費とも地方間の差は小さくなり、大勢として平準化傾向が読みとられた。